

(城端)

富山・梅原胡摩堂遺跡

河岸段丘上に立地する。今回の調査は、東海北陸自動車道建設に伴うもので、一九八九年度から九二年度にかけて四年次にわたって実施した。

- | | |
|-------|--|
| 所在地 | 富山県南砺市（旧西砺波郡福光町）梅原・宗守 |
| 調査期間 | 一九八九年（平1）五月～一九九二年六月 |
| 発掘機関 | 財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 |
| 調査担当者 | 宮田進一・高梨清志・島田美佐子・越前慎子・
田中道子・岸本雅敏・橋本正春・佐藤聖子・
河西健一・安念幹倫・佐賀和美・谷杉延子 |

- | | |
|-------|-------------|
| 遺跡の種類 | 集落跡 |
| 遺跡の年代 | 一二世紀後半～一八世紀 |

- | | |
|-----------------|--|
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |
|-----------------|--|

梅原胡摩堂遺跡は、富山県南西部に広がる砺波平野の南部に位置する大規模な集落遺跡である。砺波平野は庄川・小矢部川により形成された複合扇状地であり、本遺跡は、小矢部川の支流である山田川の浸食を受けた砂礫段丘と、より低位な

遺跡の規模は南北約1kmにわたり、その中心は時代が下るにつれて南へと移っていく。中世前期（一二世紀後半から一四世紀まで）には、遺跡の北部の大規模な溝により区画された中に、大型の総柱建物を中心に井戸・土壙墓・土坑がある。柱穴や土坑から完形の中世土師器が多数出土しており、地鎮などの祭祀が行なわれた可能性もある。中世後期（一五世紀から一六世紀まで）・近世（一七世紀から一八世紀まで）には遺跡の南部が中心となる。中世後期の建物は、小規模な掘立柱建物が主となる。竪穴状土坑や石列を伴う土坑があり、建物に付随するもの、鍛錬鍛冶を行なつたと考えられるものもある。このほか素掘りの井戸が多数あり、建物の棟数を遙かに上回る。建物を中心とした屋敷地は方形区画を意図した大溝に囲まれており、南北に道路が通っている。その北側には、現在、安楽寺跡と伝える塚が残つており、調査の結果、周辺で堀が確認されたため、堀を隔てた区域には寺域が存在した可能性があると考えられている。近世には中世後期の大溝は埋められ、建物は梁行一間の掘立柱建物、土台建物へと形態変化する。

木簡は、一九九〇年度に遺跡中央のB1地区で検出した溝SD5〇一八から二点、一九九一年度にB1地区の南に隣接するB2地区

で検出した土坑SK四四八三から一点、計二点出土した。

木簡(1)(2)が出土したSD五〇一八は、一五世紀から一六世紀まで

の屋敷地を区画する溝である。この溝は、断面が逆台形状を呈し、

幅三一〇～四四〇㍉、深さは北で約一一〇㍉南で約四〇㍉と次第に浅くなる。途中途切れる部分や台上に浅くなる部分があるものの、四条の溝が直角に連結して屋敷地を方形に区画する。溝は淀んだ状態であつたためか木製品が多く、木簡のほかに漆器椀・曲物・下駄・底板などがある。他に中世土師器・珠洲・八尾・越前・瀬戸美濃・青磁・越中瀬戸・石臼・石鉢が出土している。

卒塔婆⁽³⁾が出土した土坑SK四四八三は、一三世紀の遺構で、南北一〇五㌢、東西一二〇㍉、深さ四五㍉の不整方形を呈する。下層から大量の中世土師器と木製品（卒塔婆・柄・箸）が出土している。箸も斎串として使用されたことから、供養関連の祭祀を行なつたものと考えられる。

このほか、一九八九年度に遺跡北端のC2地区で検出した溝SD一〇一〇から、一端の左右に切り込みを入れ、また孔を穿つ短冊形の木製品が出土しているが墨書き見られない。溝SD一〇一〇一は一五世紀の遺構で、幅七五～一四〇㍉、深さ一六～三五㍉の蛇行する溝であるが、両端は近世の遺構に壊されており、性格の詳細は不明である。他に須恵器・中世土師器・珠洲・越前・瀬戸・石臼が出土している。

8 木簡の积文・内容

溝SD五〇一八

- (1) • 「▽□□」
• 「▽□□□」

117×23×5 033

- (2) • 「▽○□□」
• 「▽○□□□」

104×(25)×3 033

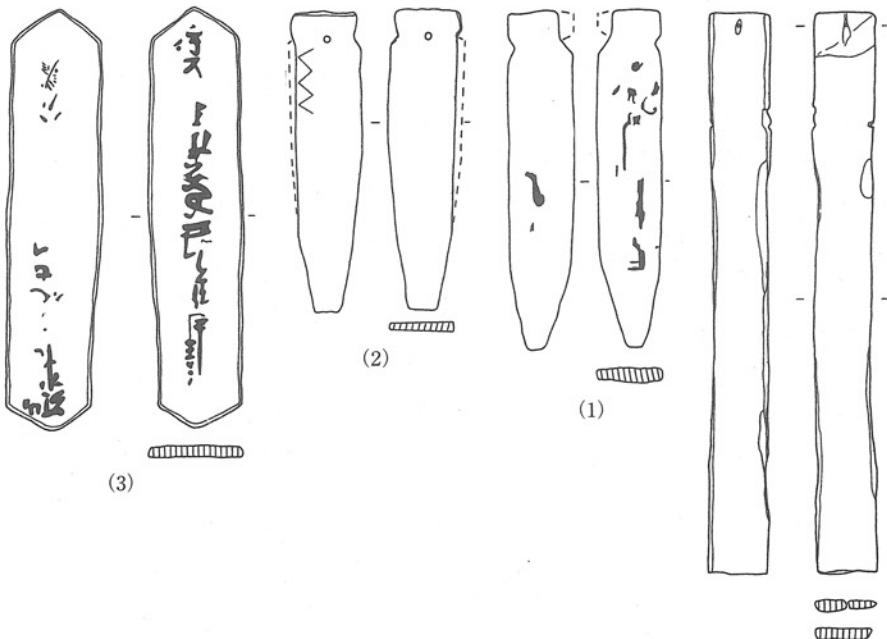
土坑SK四四八三

- (3) • 「彌^(ミ)蓋^(カニ) □^(ミ)モ^(モ)バ^(バン)ア^(ア)ウ^(ウ)ニ^(ニ)カ^(カ)」
• 「□□□□□」

146×33×4 061

(1)(2)は付札の形態をした木簡で、かすかに墨痕が認められるが、判読できない。(2)は上部の中央に孔が穿たれ、片面の左端に縦に三つの山を連ねたような線刻がある。

(3)は卒塔婆で、表面には四門展開のうちの西方菩提門と、その下にウーンが読みとれ、さらにその下に墨書きの痕跡があるが、不明瞭である。ウーンを含めた中央部には金剛界四仏、あるいは金剛界五仏が記されていた可能性がある。下部は判読不能だが、尖った部分



SD10101出土短冊型木製品

を頭にして、下からも四門展開のうちのどれかが書かれていた可能性がある。裏面は表面と天地を逆にして墨書がなされている。上部には大日報身真言（胎藏界大日真言）とみられる墨書があるが、中央部は墨書が消えしており、下部は墨書の痕跡がみられるものの判読不能である。下部には大日報身真言と一連の「三身の真言」と呼ばれる真言のうちのいずれかが書かれていた可能性がある。一般に、卒塔婆は下部を鋭利に尖らせて、挿し立てるものが多いが、(3)は上下両端とも山形に尖らせている。これは、ある種の曼荼羅的な書様のものを細い塔婆の上に書くための工夫で、(3)は両面を合わせて金剛界・胎藏界の曼荼羅的な世界を表現したものであるが、挿し立てて使用したものではなく、何かに添えて使用されたものと考えられる。

9 関係文献

(財)富山県文化振興財団『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』（一九九四年）
同『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』（一九九六年）
(越前慎子)